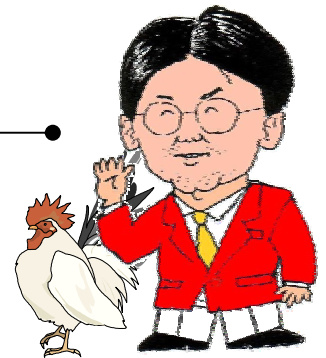


2005.1 月

賀正

本年も、どうかよろしくお願いします。
子どもの学びをいろいろな角度から、さらに追求していきたいと思っています。



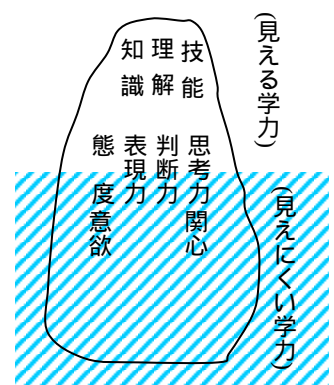
昨年の終わりに、経済協力開発機構(OECD)と国際教育到達度評価学会(IEA)が、調査結果を公表した。前者の学力調査(PISA2003)は、15 歳児の知識の活用力や応用力を問い、後者は、小4 と中2 を対象に算数・数学、理科の基礎的知識の到達度測定を目指す学力調査(TIMSS2003)である。性格は随分違うが、「日本の子どもの学力は、国際的には上位にあるが、トップレベルとは言えず、低下傾向にある。」と、二つの調査に対して似たようなコメントを文部科学省が出した。

この結果を楽観的にとらえるつもりはない。しかし、数学で好成績の香港では、成績と生活態度のギャップの大きさが顕著になり、自分に自信がない生徒の多くなっていると聞く。また、全般的に好成績の韓国では、受験が過熱する厳しい競争社会があり、適応できない人も増えていると言う。我が国も20年以上前に、これと同じような苦い経験をしている。受験戦争や受験地獄という言葉とともに、落ちこぼれ・落ちこぼしという言葉も生まれ、学習と生活の乖離が強く叫ばれた。

このような経験があるにもかかわらず、学力低下と言え、ドリル時間を新設し、指定を受けたほとんどの学校は、算数科において少人数指導(=習熟別指導)を行なって学力の向上と定着を図ろうとしている。ただ、多様な学習形態の必要性が見出せなかったり、無理に好きにさせようとしているのではないかと懐疑的な実践が見られたりしていることに不安を感じる。また、知識や技能などの目に見える力だけが学力ではないし、学力の問題を上のような方法だけで解決できるとは誰も思っていない。しかし、学力低下論の連呼で見える学力のみの向上や定着に重心が移っている気がする。

もう一度、子どもの学びを考えよう。これまで、日本は「できるだけ嫌い」な子どもが多く、「できないけれど好き」な他国の子どもと将来性が比較された。「できない上に嫌い」な子どもも現実にいる。スキル時間や少人数指導(=習熟別指導)で、本当に学ぶ楽しさを実感し、学力が向上し定着することを願う。しかし、教え込みの中心の授業で子どもたちはどうなったか。巧妙な学力低下論を鵜呑みして、過去と同じ過ちはすまい。子どもが求め、子どもが創り出す豊かな学びに、目指す学力が潜んでいる。自分の授業を省察して、確かめて見る習慣を付けたい。

(芝)



学力の構造